

意見書

東京大学 生産技術研究所 岩船由美子

第1回委員会資料⑤について、意見がありますので述べさせていただきます。
評価係数 α の設定の方法です。 α の設定は、記述にもある通り、国全体のエネルギー使用の合理化を阻害しない範囲で進めるべきです。ピーク対策を進めることで、本来の目的である省エネに逆行してはいけない、という点を基準に考えていただきたい。

1. 評価係数 α の設定の考え方について（目的と手段の混在）

P9において、 α の設定の考え方として、①の事業者の電気需要平準化に資する措置を一定程度評価する視点と、②国全体としてのエネルギーの使用の合理化を阻害しない範囲内と、並列に記してありますが、これは問題があるのではないのでしょうか。本来の目的は国全体としてエネルギーの使用の合理化を進める、ということであるはずですので、当然それを逸脱するところを推進するのは、本末転倒です。あくまで国全体としてエネルギーの使用の合理化を進めるという方向性に、事業者が取り組む方向性を一致させるような後押しをすることが、政策の目的であるはずなので、②が前提で①が決まるはずです。ですから、①と②の間を取って評価係数を1.3にするというのは合理的ではありません。あくまで②を基準に設定されるべきです。

2. 限界電源と平均電源の考え方の混在

そして結果としてP9で提案されている1.3という評価係数はP13の視点②限界電源でカウントした場合の評価係数1.31にほぼ等しいです。しかしこの α をかける相手は、P3にある通りエネルギー消費原単位、使用量そのものです。であれば、限界電源でカウントした視点②の評価係数ではなく、そのとき発電されていた電源の平均効率から算定された視点①の1.03の数値を使用するほうが、正しいのではないのでしょうか。

削減量を限界電源から試算した効率で考えるのは正しいですが、使用量には平均電源効率を用いるべきと思います。

結論として申し上げたいことは、そもそもkWとkWhを一つの指標で評価することは困難であると思います。それでも行う、適切な指標を作成する必要がある、ということであれば、上記のような矛盾が存在しないものにしていただきたい。